

## ミルクと中国芸能 —— 八重山諸島の事例から ——

こやの  
古谷野洋子\*

### はじめに

沖縄本島及び八重山諸島では、祭りの行列の先頭にミルクが現れる。ミルクは、“ニライカナイの信仰と習合して、海の彼方の楽土から世（豊作・富貴）を運んでくる五穀豊穡の神”<sup>1</sup>と考えられていて、特に八重山諸島の人々の信仰は篤い。祭りに現れるミルクは、ふくよかな笑顔の仮面の神であり、ゲンパイと杖を持ち子供を引き連れて行列を行う。さらに舞台上がることもある（ミルクは弥勒であり、ミルクの姿は布袋を模しているといわれている）。このようにミルクは芸能との結びつきの強い神である。本論は、仮面の神ミルクの芸態（本論では、全体構成や配役や音楽などを含む上演の様相全般を“芸態”と呼ぶ）がどのようにして成立したのかについての考察である。

ミルクに関連する主要な先行研究としては、柳田国男「みろくの船」[『海上の道』1951 初出]、酒井卯作「ミロク信仰の流布と機能」[『南島文化』11号 1970]、宮田登『ミロク信仰の研究 改訂版』[1975 初版]が挙げられるが、これらの先行研究は民俗信仰としてのミロク信仰についての論著であり、祭りに現れる仮面の神ミルクについての研究ではない。

かつて沖縄研究は常に本土<sup>2</sup>とのかかわりの中で行われてきた。本土には、室町時代から福神が風流の仮装行列に現れた記録があるため、従来、ミルクは本土の風流の影響として論じられてきた。しかし、『沖縄の祭りと芸能』<sup>3</sup>を著した本田安次は、同書で沖縄芸能を下記の五通りに分け、ミルクを「外来のもの」と分類した。本田の分類を記す。[本田 前掲 P44]。

- I 神祭りや行事の折々におこなわれる宗教的な民俗舞踊—民族とともに渡ってきたか。  
アッチャ舞小、巻踊、モーヤー、浜踊、六調、天草等。また、うちはれの遊びなど。
- II 鎌倉・室町から徳川初期にかけて本土より伝えられたかと思われるもの。  
念仏踊、小歌踊、太鼓踊などの風流踊。その影響を受けているウシデーク、クイチャー、エイサー、八月踊など。また古狂言。
- III 十八世紀の初め、沖縄宮廷によって大成されたいわゆる宮廷舞踊。組踊を含む。
- IV 外来のもの  
明清楽、弥勒、アカマタ・クロマタ、獅子舞、南島踊など。
- V 明治以後沖縄において創作された歌劇、史劇、雑踊など。

(弥勒のアンダーラインは筆者による)

ただし、本田は「外来のもの」という「外来」がどこからなのかは明記していない。

---

※神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科後期課程

沖縄は地理的にも南中国に近く、長い歴史を通じてさまざまな交流があった。安里進の「琉球文化圏と琉球王国の形成」[『日本を問いなおす』2002 岩波書店]によると、宋代の商人の自由な海外交易は東アジア交易圏を成立させ、彼らは各地に交易の中継地としての居留地を形成していったという。さらに安里は、当時、琉球と呼ばれた沖縄にもこれらの居留地が形成されたと考えられ、これらの居留地の中国人たちは、中国の庶民文化を近隣の地域に伝えたと考えられると述べる。

琉球王朝に入ると、明・清との冊封関係を通じて中国文化はますます浸透していった。『沖縄の習俗と信仰』[窪 1997 第一書房]を著した窪徳忠は、中国に留学した人々が王の側近および沖縄地方のインテリには多数いたはずであり、中国の諸文化を沖縄地方に伝えかつ流布させたのは、むしろこれらの人々ではなかったのかと述べている。以上のことを考慮に入れて、本論では、仮面神ミルクと類似の芸能、または影響を与えたと考えられる芸能を、中国の芸能から探ってみたい。

なお本論を進める上で、上述の「外来のもの」という分類名についてひとこと記しておく。本田は、ミルク、アカマタ・クロマタ、獅子、南島躍<sup>はえぬしま</sup>を「外来のもの」と分類し、筆者もそれに従った。しかし、本田も筆者もこれらが神行事として行なわれていることに否定的な見解を持っているわけではない。「弥勒<sup>いまふ</sup>は今来<sup>いま</sup>の神であり、物資乏しい島々<sup>しま</sup>にあつては世果報<sup>よがふ</sup>を希う人達の悲願に投じて、たちまちその信仰が広がったものと思われる」[本田 前掲 P285]、「それがどこに起源をもつにせよ、共同体の心性に支えられ神事として行われているところに、厳しい島の自然環境と闘い、豊穡を希う共同体の心のみるのである」[矢野 2003 P469]という両研究者の見解に筆者は深く共感するものである。

最後に表記と用語の使い分けについて記す。従来の研究においてミルクの表記は、ミロク、ミルク、ミリクなどのカタカナ表記、弥勒と表記しミルクとルビがふられるなど様々であり一定していない。本論では、沖縄の人々の呼称「ミルク」を使用する。ただし、先行研究の紹介、引用文等においては、その研究者の表記に従う。

なお、沖縄本島、八重山諸島のミルクの現れる祭りの調査は、2002年～2005年にかけて行なった。

## 第一章 ミルクの概要

本章ではミルクについての概要を述べる。まず、ミルクの記録について記す。次に、ミルクの現れる祭りが沖縄でどのように分布しているのか、また、分布している地域の伝承について述べる。そしてその分布と伝承から何が考えられるかを述べる。以上から、ミルクの信仰と芸態が中国の文化とかがわりが深いと考えられることを述べる。さらに、ミルクを現れ方によって幾つかのタイプに分類する。

## 第1節 ミルクの記録

天啓三年（1623年）の『おもろさうし巻七』には、次のような弥勒を歌った歌がある<sup>4</sup>。

375 一、弥勒見ちへ和る 此の生まれど弥勒  
此御神酒ぬき上げわちへ 世はちよわれ  
又、今日の良かる日に 今日きやかる日に  
又、上の世の門や 下の世の門や

『おもろさうし』は、「首里王府が沖縄を中心にした島々村々に伝わる神歌のクェーナやウムイなどを三回にわたって採録し、整理し、編集したときに、ウムイをオモロという名に呼び変えて『おもろさうし』という冊子にしたものである」〔外間 2000 P447〕と言われる。この歌の収められている『おもろさうし巻七』は首里のオモロを集めたものであり、上述の歌にうたわれている上の世の門は守礼門、下の世の門とは中山門のことである<sup>5</sup>。弥勒を歌った歌は、約1500首（重複があるので実数1248首）あるオモロの中でこの1首だけであるが、17世紀、弥勒が首里で信仰されていたことがわかる。

平敷令治は『沖縄の祭祀と信仰』の中で、近世における首里・那覇の祭儀生活が重層信仰を基盤としたものであり、首里、那覇、及び近郊農村では、外来信仰が習俗化して、荒神、セーヌ神、エビス、ビジュル、他の聖石、ミルク、土帝君が信仰されたと述べている。このように、ミルクの信仰は外来信仰が習俗化したものと考えてよいであろう。

次に、ミルクがどのような形で祭りに現れたのかを文献から見てみたい。祭りに現れたミルクについて最も古い記述は、「三司官伊江朝睦日記」中の記述である。同書によると、嘉慶21年（1816）7月17日の条には、「赤田村の似念仏は鍬、長刀、弥勒、二才踊から成る行列であった」とある〔平敷 前掲 P445〕<sup>6</sup>。このように、祭りに現れたミルクの最初の記録は、盆行事の〈行列するミルク〉であった。

## 第2節 ミルクの現れる祭りの分布

800キロにわたって弧を描いて連なっている奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島（宮古諸島・八重山諸島）を、本論では同一の沖縄文化圏として扱う。現在、奄美諸島は沖縄県ではなく鹿児島県であるが、薩摩藩に割譲される以前は琉球王朝の支配下にあり、琉球の文化圏に属していたので、奄美も含めて沖縄文化圏を考えたい。

### 1) ミルクの現れる祭りの分布

現在（2005年）のミルクが現れる祭りについて、筆者の調査結果から、資料1表：「ミルクの現れる祭りとミルクの現れ方」と、資料2「ミルクの表れる祭りの分布図」を作成した<sup>8</sup>。その結果、ミルクが祭りに登場するのは八重山諸島と主に沖縄本島中南部であることがわかった。奄美諸島・沖縄北部には、ミルクの現れる事例を聞かない。宮古諸島にもミルクは現れない。筆者の調査結果がミルクの現れるすべての祭りを網羅しているとはいえませんが、この結果からも既にミルクの現れる祭りの分布が著しい特徴をもっているのがわかる。

## 2) 分布からの考察

次にこれらの分布からわかることを述べる。まずミルクが祭りに登場する沖縄本島中南部について述べる。湧上元雄は『沖縄民俗文化論 祭祀・信仰・御嶽』の中で、沖縄本島中南部の文化成立の基盤は琉球海外貿易であると述べ、この文化を<中国習俗に染まった町方文化>と呼んでいる。貿易の相手国である中国や、当時、那覇に住んでいた中国人から伝わった文化をもとに創出された中国色の強い町方文化であったと考えられるという。

前述したように、琉球王朝下のミルクの信仰は中国からの外来信仰が習俗化したものと考えられる。ミルクの信仰は、さまざまな芸能や各地の固有信仰と結びついて、祭りに現れる仮面神ミルクとなったと筆者は考える。「三司官伊江朝睦日記」に記された赤田の似念仏に現れた弥勒は、すでに現在の仮面神ミルクの姿であり、仮面神ミルクは首里から沖縄中南部に伝わっていったと考えられる。一例として、大里村古堅<sup>ふるげん</sup>のミルク行列「ミーミンナーメー」は赤田のミルクを做ったといわれているが、当地は首里の御殿、殿内への奉公人が多かったという。

次に八重山諸島にミルクが現れる理由について考えたい。八重山諸島が琉球王府に決定的に服属したのは、第二尚氏三代目の尚真王（15世紀後半）からである。王府は先島（宮古・八重山）を直接統治し、中央から役人を派遣した。ミルクは、琉球王府の支配下に士族によって八重山諸島に伝えられたと考えられる。狩俣恵一は、『南島歌謡の研究』〔狩俣 2003 瑞木書房〕で、宮古諸島と八重山諸島の祭りの違いを士族の介入という視点からとらえた。八重山諸島には祭りに士族の介入があったため、琉球王朝の芸能が伝えられ、芸能が盛んになったというのが狩俣の説である。さらに狩俣は、ミルクを“士族のもたらす新しい神”とし、士族がミルクを赴任先の八重山諸島にもたらしたと述べている。

沖縄北部、奄美諸島、宮古諸島にはミルクの祭りに現れる事例は今のところ見出せない。琉球王朝の奄美統治は島津の琉球入り（1609年）で途絶え、以後、奄美諸島は薩摩藩に割譲された。そのため仮面神ミルクは薩摩統治下の奄美諸島には伝わらなかったと考えられる。

沖縄本島北部にもミルクは現れない。沖縄本島北部は奄美と共に、沖縄中南部とは異なる伝承文化圏を構成していることは小野<sup>9</sup>も湧上も指摘している。つまり、沖縄本島中南部と異なり、この地域はミルクを受け入れにくい伝承文化圏であったと考えられる。

次に、宮古諸島にミルクが現れない理由について考えたい。狩俣は、宮古諸島の祭りでは、士族の介入というより規制が行なわれたため、祭りは秘祭の傾向を帯び、芸能も盛んにはならなかったと述べている。そして宮古諸島の祭りは、士族との係わりが希薄であったため、士族のもたらす新しい神、ミルクを受け入れることはなかったと述べる。同じ先島諸島でこのように祭の形態が違う理由はさまざまあると考えられるが、ミルクの受容に関しては狩俣の説が妥当と考えられる。

## 第3節 ミルクの伝承

ミルクは沖縄本島と八重山諸島に分布することがわかった。次にこのふたつの地域のミルクに

ついでにの伝承を記す。

#### 1) 沖縄本島のミルクの伝承：首里・赤田の伝承

『那覇市史 資料編 第2巻中の7 那覇の民俗』（以下、『那覇市史 那覇の民俗』と記す）によると、玉那覇有章氏の談として次のような赤田のミルクの伝承が伝えられている〔那覇市企画部市史編集室 1979年 P700〕。

今から三百年前首里殿内から派遣された、求道長老（グドゥチョウロウ）はたい国に渡り、王に会い、当時琉球の教育の問題、信仰の問題について進言したところ、王は釈迦、孔子、弥勒、何れを信仰したいかと聞かれた。求道長老は小さい琉球国では、平和を祈るためミルクを信仰したいということで、ミルクをたい国から持帰り、首里殿内ではこれを毎年七月に御祭りを行なうことになった。

ところがある年、首里に天然痘（チュラガザ）麻疹（イリガザ）が流行し多くの患者が出た。赤田の村では一人の患者も出なかったということで、村ではこれは弥勒様のお陰であると信じていた。

その後赤田の村全体がミルクの信仰を申し出て、首里殿内と赤田の村が共催で祭りを行なうことになった。首里殿内が三殿内と併合され、天界寺に移った後は、求道長老に管理させたとのことである。求道長老は赤田村の大石川（ウフィシチャー）の元祖であったために、石川門中はミルクを信仰するようになり毎年の祭りも石川家が主催するようになったとのことである。求道長老の屋敷は現在の赤田町一の十一番である。（玉那覇有章談）

上述の文章からは、〈たい国〉がいかなる国であるのか不明だが、ミルクは、異国からやってきた神であること、最初は首里殿内で祭られていたが後に赤田の村全体で祭られるようになったこと、祓い清めの神であったことがわかる。

上述の引用文中の首里殿内とは、「首里三殿内」のひとつ、赤田の「首里殿内」のことである。赤田の「首里殿内」の敷地跡は、現在の赤田公民館「赤田クラブ」となっている。館内には「赤田弥勒御堂」があり、ミルクの仮面と“作りものの腹”、ゲンパイが安置されている。盆に行われるミルク行列はこの「赤田クラブ」から出発し、集落の周囲を回る。行列時に演奏される音楽は路次楽と呼ばれ、つおな（チャルメラ）、どら、くーちゃんちゃん、銅羅、鼓、新心を使用する。

『那覇市史 那覇の民俗』によると、首里の芸能は、綱引、弥勒、獅子舞の三つに大きく分けられ、弥勒と獅子舞は「首里三殿内」から出ているとして、次のように記している〔那覇市企画部市史編集室 前掲 P699～P700〕。

この「三殿内」は「ヌール」（のろ＝祝女）の元締めで、沖縄じゅうの主な祭りは「三殿内」の大あむしられの司祭で行なう重要な役割を持っており、この「三殿内」から弥勒と獅子を首里の主な村々の人に賜った。首里殿内から赤田の石川某に弥勒を、儀保殿内から汀良の比嘉某に獅子、真壁殿内から真和志の石川某に獅子を賜ったといわれ、毎年八月十五日に赤田では弥勒を、汀良と真和志では獅子舞を演じて豊年を祈願し、悪疫を払った。

上記の文章からは、ミルクと獅子舞が「首里三殿内」から出ていて、豊年を祈願し、悪疫を払

う芸能であったことがわかる。ノロ殿内にミルクの仮面が置かれていた例は宜野湾市野嵩にもある。<sup>7</sup>

## 2) 八重山諸島のミルクの伝承：石垣島登野城とのしろの伝承

次に、八重山諸島におけるミルクの伝承について記す。喜舎場永珣の『八重山民謡誌上巻』によると次のような言い伝えがあるという。その要約を記す〔喜舎場 1967 P93 - P94〕。

寛政三年(1791)、黒島首里大屋子の大浜用倫が公用を帯びて上国の帰途、逆風に逢い、安南に漂着した。用倫は折りから豊年祭で弥勒仏が出ていたのを見て、乞うて弥勒面を得、福州を経て沖縄に帰着した。用倫は随行の百姓新城筑登之(ちくどん)に自ら作詞作曲した弥勒節や新調の衣装などを託した。用倫は帰途、また疾風に逢い、船は中国に漂着し、用倫は中国で歿したという。筑登之は託された歌と面と衣装とを登野城に伝えた。これが今日の八重山の弥勒ならびに弥勒節のはじめであるという。

上述のミルクは、今でも登野城のアラグスヤーと呼ばれる赤瓦の家に獅子と共に保管されている。アラグスヤーは、八重山諸島にミルクを持ち帰ったといわれるあらくすくちくどん新城筑登之の新城家である(現在、新城家は空き家だが、庭には拝所が数ヶ所ある)。現在でもミルクは十二年に一度、寅年の結願祭に現れ、行列をし、大浜家に寄り儀式を行う。なお、獅子舞いも毎年正月にアラグスヤーから出発する。

八重山諸島には、稲を伝えた神は、安南国、アレシン国、カンボジア国からやってきたという伝承がある〔宮田 前掲 P278〕。八重山諸島にとっては、安南、アレシン国、カンボジア国は稲の伝来と結びつく地名であることがわかる。豊年祭に現れるアカマタ・クロマタも安南から伝わった神であるという伝承がある。このように、八重山諸島の神々や稲作の由来伝承が安南説であることから考えるに、八重山諸島では、海の外からやって来た自分たちにとって大切なものは安南から来たといわれていたのではないかと考えられる。

また、稲作が安南から伝来したという伝承が存在することから、稲作や豊穰に関する事柄は、八重山の人々にとって安南という言葉と自動的に結びついたのではないだろうか。本論では、喜舎場永珣の記録した伝承に記されている安南が、必ずしも実際の安南を意味しているのではないと考える。喜舎場永珣の記録した伝承では、八重山諸島のミルクが士族によって伝えられたということに注目すべきである。与那国島にも士族が娘にミルクの面を持たせて嫁がせたという伝承があり、筆者が聞いたところ、小浜島のミルクの仮面は士族の顔を真似て作られたという。

以上のことから、沖縄中南部に広まった仮面神ミルクは、士族によって八重山諸島に広められたと考えられる。

## 第4節 ミルクの分類

各地域の祭りにおけるミルクの芸態は様々であり、決して同一ではない。しかし、本論ではミルクの現れ方から以下のタイプに分ける。<sup>10</sup>(資料1 表=「ミルクの現れる祭りとミルクの現れ方」)

## A. 行列するミルク

行列は、ミチジュネーあるいはスネーイなどと呼ばれる。ムラマツリには決まったミルク行列のルートがある。行列のルートは、下記のように分類できる。本論における分類とその祭りの例を記す。(本は沖縄本島を表わす)

1. 集落の周囲を回る：赤田のミルク (本)
2. ノロ殿内 (ないし仮面の収められている場所) から舞台まで歩く：宜野湾市野嵩<sup>のだか</sup> (本)
3. 集落内の拝所巡り：古堅<sup>ふるげん</sup>のミルク (本)
4. 綱引きの行なわれる場まで：真栄里<sup>まえさと</sup> (本)、糸洲<sup>いとす</sup> (本) のミルク (獅子と共に現れる)
5. 御嶽の前のカミミチを歩く：石垣島白保<sup>しらほ</sup>のミルク
6. 昔のオーサー (番所) 付近を歩く：波照間島<sup>はてるま</sup>のミルク
7. 浜辺を歩く：黒島の豊年祭のミルク (ハーレー行事が伴う)
8. 行列して庭で芸能：保栄茂<sup>びんぼ</sup> (本)、波照間島、石垣島大浜のミルク

## B. 舞台に現れるミルク

このタイプのミルクは舞台に現れるだけで行列はしない。このタイプである八重山諸島竹富島の種子取祭に現れるミルクは、「この島のミルクはミルク神とって敬われている。行列する“遊びミルク”ではない」と島の人にいわれている。沖縄本島中南部の、宜野座村<sup>よのざ</sup>、東風平<sup>あざな</sup>町の字東風平のミルクは、舞台の上で躍る。

## C. 行列+舞台のミルク

このタイプのミルクは、行列して、さらに舞台にも現れる。沖縄本島では西原町棚原のミルク、八重山諸島では石垣島川平のミルクなどがこのタイプである。

## D. 板台に乗ったミルク

八重山諸島黒島の東筋<sup>あがりすじ</sup>の旧正月に現れるミルクは板台に乗って、御輿のように担がれて現れ、相手方の総代に「五穀の種子」の授受を行なう。

Dのタイプは、現在のところ黒島のミルクの例しかみだせない。しかし、両側から板台に乗って現れる神と女性 (ツカサ) の間に五穀の種子の授受が行なわれるという儀式が、石垣島の四ヶ字や白保の豊年祭に見られる。このため、黒島のミルクは「板台に乗って現れる神と女性 (ツカサ) の間の五穀の種子の授受」のヴァリエーションと考えられる。

沖縄本島中南部・八重山諸島の両地域において、Bタイプの舞台のみに現れるミルクはごく僅かである。しかし、Cタイプは、AタイプとBタイプの折衷と考えられる。筆者は、上記の分類において最も基本的なミルクの芸態は、行列すること、舞台に現れることであると考え。本論では、<行列するミルク>と<舞台に現れるミルク>の事例を挙げ、これらのミルクと類似、または影響を与えたと考えられる中国の芸能について記す。なお筆者が八重山諸島の例を挙げたのは、八重山諸島ではミルクが祭りにおいて大きな役割を果たしていること、人々のミルクに対する特別な思いがみられる等の理由からである。

なお、赤田のミルク、古堅のミルクの仮面は頭からすっぽりと被る面である。ミルクには“腹

の作り物”もあり、行列時には胸をはだけて作り物の腹を見せる。それに対して八重山諸島の面はデイゴの木などで作った片面であり、腹の作り物はない。

資料1 表：「ミルクの現れる祭りとミルクの現れ方」 調査：2002年～2005年

典拠：筆者の行なった祭りの実地調査，及び資料による。資料名は注11に記した。

- \* 沖縄の祭りは、例外を除いて全て旧暦で行なわれる。新暦の場合は（新）と記した。
- \* 沖縄本島では同じ日に行われる祭りでも名称は一定していないので、各地域におけるよびかた，資料に記してある名称を載せた。
- \* （7年マール）などのマールとは，～年に一度という意味である。

沖縄本島			
	地名	祭りの名称と時期	ミルクの現れ方
1	首里 赤田町	ミルクウンケー (新) 8月15日近くの日曜日	・行列
2	大里村 <small>ふるげん</small> 古堅	ミーミンナーメー（豊年祭） 4月1日	・行列するミルク
3	糸満市 <small>まゑざと</small> 真栄里	十五夜綱引き 8月16日	・行列するミルク
4	糸満市 <small>いとす</small> 糸洲	十五夜綱引き 8月15日	・行列するミルク
5	宜野湾市 <small>のだか</small> 野嵩	豊年祭（7年マール） 8月15日	・行列するミルク
6	西原町 <small>たなばる</small> 棚原	ミルクモーイ(12年マール) 8月15日，16日	・行列＋舞台
7	那覇市 辻	二十日正月 1月20日	・行列するミルク
8	豊見城市 <small>びん</small> 保栄茂	ジューグヤー（豊年祭） 8月15日，16日	・行列
9	与那原市	綱引き 8月10日	・行列するミルク
10	東風平町 <small>こちんだまち</small> 字東風平	豊年祭 8月15，16日	・舞台
11	宜野座村 <small>きのざむら</small> 字宜野座	8月遊び 8月11日	・舞台
12	金武町 <small>きんぶ</small> 金武地区	十五夜遊び 8月15日	・行列＋舞台
13	具志頭村 <small>ぐしかみ</small> 玻名城	十五夜遊び 8月15日	・行列するミルク
14	座間味村 座間味	海神祭 10月1日	・行列するミルク
八重山諸島			

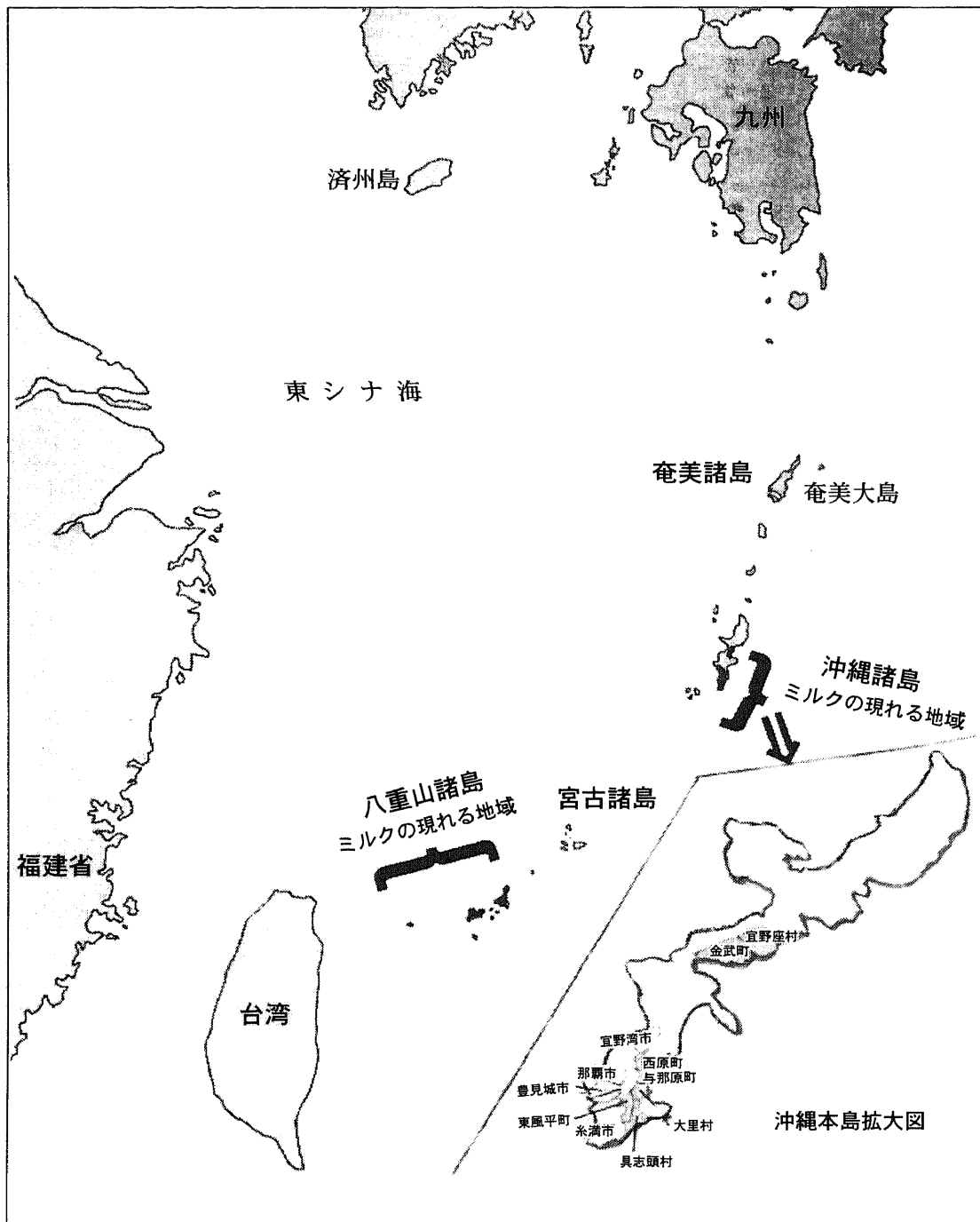


	地名	祭り	ミルクの現れ方
1	石垣市 白保 <small>しらほ</small>	豊年祭	・行列するミルク
2	石垣市 大浜	豊年祭	・行列するミルク
3	石垣市 平得 <small>ひらえ</small>	結願祭	・行列するミルク
4	石垣市 登野城 <small>とのしろ</small>	結願祭(12年に一度の寅年)	・行列するミルク
5	石垣市 川平 <small>かひら</small>	結願祭	・行列+舞台
6	石垣島 宮良 <small>みやら</small>	結願祭	・行列するミルク
7	竹富島	種子取祭	・舞台
8	小浜島	結願祭	・行列+舞台
9	黒島 東筋 <small>あがりすじ</small>	旧正月	・板台に乗ったミルク
		結願祭	・舞台
10	黒島 (島の祭り)	豊年祭	・行列するミルク
11	西表島 祖納 <small>いりおもてしま そない</small>	節祭	・行列+栈敷
12	西表島 星立	節祭	・行列
13	西表島 古見 <small>こみ</small>	結願祭	・行列+舞台
14	波照間島 <small>はてるま</small>	盆	・行列するミルク
15	鳩間島	豊年祭・結願祭	・行列(?)
16	与那国島 <small>よなぐに</small> (現在, ミルクは現れない)	(豊年祭・結願祭)	(行列+幕前に坐る)

\*八重山諸島では、稲作をもとにした儀礼や祭祀は、<sup>シツ</sup>節から始まり、播種儀礼は種子取祭、刈り上げ儀礼は豊年祭、終結は結願祭である。祭りの日程はその年によって違い、主にツカサたちが中心になり公民館役員と共に日程を決定する。

- ・豊年祭：旧暦6月に行なわれる。豊年を感謝し、来年の豊かな稔りを願う。
- ・結願祭：旧暦の8月に行なわれる。一年間の祈願の成就を神に感謝する。
- ・節祭：旧暦の8, 9, 10月に行なわれ、節変わり、年の変わり目、年の折目を祝う祭祀の事で、正月を意味している。
- ・種子取祭：旧暦9月～10月にかけて行なわれ、稲や粟の種を蒔き、無事に育つことを祈願する。

資料：ミルクの現れる祭りの分布概念図



## 第二章 行列するミルクの例 — 波照間島の“あそびミルク” —

本章では、〈行列するミルク〉として、八重山諸島波照間島のムシャーマのミルク行列について記す。竹富島の人々は、行列するミルクを“あそびミルク”と呼ぶが、まさに波照間島のミルクは“あそびミルク”の代表といえる。

### 第1節 波照間島のムシャーマ

#### 1) 波照間島の概要と盆行事

波照間島は日本最南端の島である。八重山諸島の中心となる石垣島の港棧橋から、一日3便出ているフェリーで約1時間の位置にある。周囲14.8kmの平らな島であり、5部落<sup>1)</sup>に約700人の住人がある。波照間島の生業は、以前はカツオ漁、稲作であったが、現在はサトウキビが主な産業となっている。島唯一のサトウキビ工場が西浜の手前にあり、一年間に数ヶ月間操業している。

八重山諸島ではミルクは、旧正月（黒島）、豊年祭（白保、大浜）、節祭（祖内・星立）、結願祭（小浜島、登野城、川平、宮良）に現れるが、波照間島のミルクだけはお盆に現れる。現在、沖縄全域でお盆にミルクが現れるのは、この波照間島と首里の赤田だけである。波照間島の長老の勝連文男さん（大正7年生）によると、7月（沖縄のお盆は旧暦で行なわれる）は“7月のあそびづき”ともいわれ、盆のムシャーマ行事ではホトケを慰め、島の住民の健康祈願をして、島民の人心一致を兼ねて、めいめいが芸能を出し合って互いに喜び合うという。ムシャーマが盆に行なわれるのは、「ミルクと豊年にちなむ行列は、もと豊年祭に出たものであるが、東西の両組が、旗頭のことから大喧嘩をしたため島の役人の処置により、仮装行列は盆行事のムシャーマに移すとされた」〔本田 前掲 P113〕からであるという。

本論の調査は、2004年度の旧盆に行なった。まず、波照間島の盆行事について簡略に記す。旧暦7月13日の「シキルピン」は先祖のお迎えの日である。午前中はどの家でも庭先でサトウキビの茎で盆飾りを作る。盆飾りが出来たら仏壇の飾り付けをする。この準備に午前中いっぱいかかり、午後になると墓に仏を迎えに行く。この日は一晩中仏壇の線香を絶やさないようにして、三線を弾いたり酒を飲んだりして夜を過ごす。

14日の「ムシャーマの日」は、朝早くからそれぞれの集会所で仮装行列の準備をする。午前中いっぱい仮装行列を行なう。この日は観光客も訪れ、仮装行列の行われる公民館前（むかしの番所）の広場には熱気がただよう。15日の「ウグリピン」は送りの日で、夜になると、思い思いの仮面で顔を隠したアンガマたちがドラを叩いて家々をまわる。16日の「イタシキバラ」は島のガキモノを追い出す日といわれる。勝連文男さんによると、お盆には身寄りのないホトケ（ガキモノ）が部落内でうろうろしているので、獅子を出して狂乱させ、ドラを叩きながら部落中を歩いて追い出すという。

#### 2) ムシャーマ

現在、ムシャーマの仮装行列は、東組、西組、前部落の3組に分かれて行なわれ、それぞれの仮装行列の先頭にミルクが現れる。1903年以前は、ムシャーマの仮装行列は島を東西に二分し、東

(南と北部落)と西(富嘉と名石部落)の2組によって行なわれていた。前部落の役員の話によると、前部落は、昔は部落の会館の前の道路から二つに分けられ、北と南の部落についていたが、「一つの部落を分けるのは忍びない」ということで独立して参加することになったという。独立して今年で101年になる。このようないきさつで、波照間島のムシャーマのミルクは3人になった。

芸能は、午前の部の「仮装行列」と公民館の庭で行われる「庭の芸能」、午後に舞台で行われる「奉納芸能」、帰りの「仮装行列」、「各会館に戻った後の芸能」に分かれる。以下、筆者の調査した前部落の仮装行列を中心に、ムシャーマの流れを述べる。

## 行列の準備と行列

### ①ミルクを被る前の儀式

前部落会館前に午前8時頃集合。会館の前庭にゴザを敷いて、ミルクの仮面をゴザの椅子の上に置く。ミルクを被る人、プーブザー役の人、役員が坐り、その周りに棒術などの男たちが坐る。コップに酒をついでまわして飲む。祭りの総務部長の挨拶とミルクを被る人の挨拶がある。

### ②仮装行列の待機

公民館の前の広場に通じるそれぞれの道路でミルクを先頭に三組の仮装行列が待機する。仮装行列は3部落順番にやるが、その順番は毎年代わる。

### ③公民館まで行列する。行列は次の順序で行われる。

1. 旗
2. “なりもの”の木(竹の枝に色とりどりの“なりもの”を飾り付けたもの)
3. ミルク
4. ミルクが休憩するときの椅子もちの男の子。
5. 五穀の種を入れた籠を持つ女の子。
6. 手に旗を持った子供たち。
7. 太鼓を鳴らしミルク節を歌う年配の女性たち(ハチマキを巻き太鼓や団扇を持つ)。
8. ミルク節の演奏者二人(三線)。
9. マミドーマ
10. かりゆし節
11. 稲スリ
12. 馬ブシャー
13. 棒
14. 太鼓
15. 鬼
16. 獅子

出演者は踊りや、演奏、演技をしながら行列をする。ミルクは「ミルク節」の演奏に合わせて

てゆっくりとグンパイを振りながら進む。その間、ミルクの別れた夫といわれるブーブーザーは行列の端から端まで行ったり来たりしながら、棒術の演技にちょっかいをだしたりする。ブーブーザーはクバの皮を頭に被り、顔全体を覆うすだれのような髻で仮面はつけない。腰にタバコ入れを付け、手にはクバの団扇と長い杖を持つ。村の人々は、ブーブーザーは酒飲みで、遊び好きなのでミルクに捨てられた、ミルクは女一人で子孫繁栄したから、ブーブーザーは行列の中には入れてもらえず、ミルクの周りを走り回っているという。

## 公民館の中庭の演舞

### ①ミルクの踊り

公民館の中庭に入り、ミルクはお供の持ってきた椅子に坐る。ミルクとそのお伴、三線の地方のまわりを、太鼓の婦人たちがミルクを取り囲んで、「ミルク節」に合わせて左回りに回りながら踊る。踊りが終わったらミルクの役の人々は面をとって、公民館の脇のミルクの席に坐り、茶で接待される。ミルクの面は公民館の中に置かれる。

### ②仮装行列の踊り、太鼓、棒術

ミルクに続いて、仮装行列の踊り、太鼓、棒術が中庭で披露される。しかし、獅子と鬼は、棧敷席と反対側で待機する。

### ③念仏踊り

3部落の庭の芸能が終わったら、念仏唄（無蔵念仏）に合わせて念仏踊りを踊る。この念仏踊りは、三線の奏者と役員をまん中にして若い男たちが輪を作り、その回りをうさぎ跳びで時計回りにピョンピョンと跳び続けるものである。これで午前の部は終り、各自昼食をとる。

午後の部は3部落の奉納芸能が公民館に作られた舞台上で奉納される。仮面をとり衣装を脱いだミルク役は、特別席に座り昼食と酒でもてなされる。舞台の奉納芸能が終ると、中庭で「獅子の棒踊り」と獅子舞が行なわれる。獅子舞の後、再び念仏踊りをして終了する。公民館に来たときと同じ順序でミルク行列をして、各組の会館に戻る。会館に戻ってから、再び会館の庭を行列し、ミルクの周りをミルク節の演奏で輪になって踊る。次に、役員、地方などを取り囲んで念仏踊りをする。最後にミルク役の挨拶で終る。

## 3) 波照間島のミルクの特徴

ここでは、波照間島のミルクの特徴について考えたい。ムシャーママでは、3集落から一人ずつ、計3人のミルクが現れる。ミルクが3人も同時に現れるという例は他には聞かない。この3人のミルクも前部落が独立するまでは2人ミルクだったのだが、2人のミルクが同時に現れるという例も他には無い。沖縄の祭りは、綱引きに見られるように二つの組（集落）の競争、対抗という形で行われるが、このような場合でも、片方の組にミルクがでれば、もう一方には福祿寿や按司を出す。行列の数だけミルクを出すのは波照間島だけである。

3人のミルク役は席に着き、面をはずし、茶でもてなされ庭で行われる芸能を見る。これは、波照間島のミルク役は神になりきることは要求されていないことを意味する（西表島祖内のミルク

役は、祭りの間中トイレもいかない、水も飲まない) このように、ミルクが3人も現れることや、ミルクの仮面を被る人が神になりきることをそれほど要求されないことから、波照間島のミルクは神として崇められるミルクではなく、あくまでも仮装行列の先頭になるミルクであると考えられる。さらに、ミルクに道化の役割の別れた夫がいることから、ミルクが人間臭い神であると人びとに考えられていることがうかがわれる。

盆行事に行なわれるムシャーマでは、先祖の供養として念仏歌が唱えられ念仏踊が行なわれる。獅子も盆に現れる身寄りのない餓鬼を追い払う役割を果たしている。役割分担から考えるに、ミルクは仮装行列の先頭に行くカナメの役割と考えられる。以上からも、波照間島のミルクは仮装行列を率いる遊戯性の強いミルクであることがわかる。

## 第2節 <行列するミルク> に類似した中国の芸能

ミルク行列のように、僧の仮面を被ったものを先頭にして行列をするという芸態はどこからきたのであろうか。本論では具体的に類似の中国の芸能を挙げる。

### 1) 儼儀に現れる仮面神・弥勒

第一章で筆者は、ミルクは、琉球王朝下に伝わったミロクの信仰がさまざまな芸能、および各地の信仰と融合してできた仮面神であり、沖縄中南部に広がり、のちに八重山諸島に広まっていったと考えると述べた。しかし、実は弥勒という名の仮面神は中国に存在するのである。

『中国面具史』〔顧朴光 1996 貴州民族出版社〕によると、宋元時期は「在思想領域，宋元時期最重要的現象是儒，道，仏三教の合流」〔顧 前掲 P249〕であり、「儒，道，仏合流反映在哲學上是“理學”的出現：反映在民間是与巫教融匯，是儒，道，仏，巫的鬼神共同組成一個膨大雜種的神聖家族，和平共存處於世俗的祭壇之上。這對於面具的發展產生了巨大而深遠的影響」〔顧 前掲 P250〕であるという。つまり、宋元時代になると、儒教、道教、仏教の三教が共存するようになり、儒教、道教、仏教、巫の神が混淆して祀られるようになったため、仮面文化もその影響を受けたというのである。

中国には、仮面の神が祭りに現れ、除災招福を目的とした行事に儼の行事がある。明清時代になると、宮廷の儼文化が地方に伝わり、地方に儼文化が興隆した。顧によると、その一つの流れが四川、貴州、雲南、湖北、湖南、広西、江西、安徽、福建省であるという〔顧 前掲 P257〕。廣田律子<sup>12)</sup>によると、中国では、除災と招福を目的とする信仰儀礼と、仮面劇を上演する民俗芸能は切り離せない関係であるというが、これらの地では儼の仮面の使用、製作が盛んに行なわれたと考えられる。どのような仮面が使用されていたのかがうかがわれる資料として、時代はくだるが清の乾隆帝の時代、宮廷演劇に使用された仮面の資料が残っている。顧はこれらの仮面は民間劇の仮面とはほぼ同じであると記している〔顧 前掲 P260〕。光緒十九年(1893)の恩賞日記によると、慈禧太后六旬大寿時に準備された仮面は230個であり、その内容は次のようであった〔顧 前掲 P260〕。なお下記の引用においてはわかり易いように、一部の漢字を日本の漢字に改めた。

寿星套頭120個 二十八祖套頭20個, 侍从鬼套頭8個, 雷公套頭10個 弥勒套頭2個, 大頭和尚柳翠套頭4個, 阿修羅套頭4個, 金翅鳥套頭2個, 無常鬼套頭2個, 岳主套頭20個, 大頭鬼套頭2個, 髑髏鬼套頭8個, 送生朗君套頭2個, 羅漢套頭18個, 魑魅魍魎套頭8個  
上記の記述からも, 宮廷において弥勒の仮面が使用されていたことがわかる。

## 2) 福建省の儺文化と仮面神・弥勒

では, 民間の儺の行事に仮面神弥勒はどのように現れたのであろうか。顧『中国面具史』〔前掲〕の「福建儺舞及其面具」の項から, 福建省の儺文化とその演目の弥勒について紹介する(日本語で要約を記す)。

福建省は越文化圏に属し, 古来“信鬼好祠の地”である。西晋末年永嘉の乱以降, 大量の人々が南に渡った結果, 中原の文化が閩に伝わり古越文化と融合し, 独自の特色を具えた儺文化が成立した。宋人の梁克家所選の《三山志》によると, 北宋時に福州一帯に“邪呼逐除之戲”(俗称は“打夜狐”)が盛んに行なわれていたとう。明代以降, 八閩大地には儺文化が流伝し, “邪呼逐除之戲”は一層盛んにり, 取締りを受けたこともある。光緒《長汀県志》には, 「郡城迎春日に, 鬼面を借りて, 毎年交代で雷神の扮装をする。迎春三日の前に雲の形をみて春の雷を占い, 一群を率いて, 門を望んで鶏を殺し分け合う。また, 市井舞の子供たちは, 正月十一日から元宵祭が終わるまで, 街の人家に沿って跳舞を行う。明の崇禎七年春, 張直の指摘に応じて行政庁はこれを禁じた」<sup>13</sup>と記されている。

この地域の儺の行事は, 閩北の邵武, 光澤, 建寧, 泰寧の四県に分布し, 主な演目は《跳幡僧》《跳八馬》《跳弥勒》《跳五神》などである。閩北に儺舞が流行したのは, 閩北は僻地であり経済的にも遅れていて, 医者に欠け薬に乏しく伝染病が猛威をふるっていたためといわれる<sup>14</sup>。

次に, これらの演目について記す。

1. 《跳幡僧》は《跳番僧》ともいう。邵武市大阜岡村, 河源村の《跳幡僧》には, 開路神, 弥勒, 唐僧, 孫悟空, 猪八戒, 沙和尚の6人の演技者が現れる。桐の木で彫った, 頭半分を覆うような仮面を付け, 仮面の後頭部には紅布を縫い合わせてある。開路神は紅顔で, 口には牙が生え, 獠猛な顔つきである。弥勒は白い顔で慈眉善目, 笑い顔である<sup>15</sup>。唐僧とその弟子は, 戯曲の顔の造形である(戯曲とは『西遊記』を指すと考えられる一筆者)。開路神は両手にそれぞれ木口を持つ, 弥勒は左手に木魚を持ち, 右手でバチを持ち木魚を叩く。唐僧とその弟子はそれぞれ前に扁鼓, 後に黄幡を付ける。幡には“経”という字が書かれている。舞踏時に, 手中の道具を叩き, リズムをとる。開路神と弥勒の護衛によって, 唐僧と弟子が無事インドから真経を持ち帰ったという内容である。
2. 《跳八馬》は邵武市河源, 将石, 大岭及び, 建徳県の楚尾などの郷村で行われている。演者は8人, 開路神, 弥勒, 紅顔神, 緑顔神, 各2名であり, 弥勒を除いてすべて獠猛な面を被る。将石村では, 24人で編成される白色の凶相の面を付けた“神鼓隊”がつき, “神鼓隊”は“神衣”を着て胸前に大太鼓を吊るして演奏する。

3. 《跳弥勒》は邵武市大阜岡村と和平村などの地で流行し、出場人物はわずか弥勒公と弥勒婆の2人であり、弥勒公は木質、あるいは紙性の面を付け、和尚の装いで、腹部を竹と土箕で飾った“大肚子”で覆う。手にはちりはらい、あるいは破葵の扇を持つ。表演時、2人は松明の火の照明の下で、お互いにからかい合い、こっけいなしぐさをして観衆の笑いを誘う。
4. 《跳五神》は建寧県、溪源郷で流行していて、紅白緑黒黄の面を付けた5人の演者によって演じられる。面は油紙を層にして製作される。面の絵は凶暴で恐ろしい。伝承によれば、五谷神が五谷の種子を人間に手渡したので、人間は毎年豊作を得ることが出来た。しかし、人々は穀物を大切にせず、餅で子供の坐る椅子を作るなど粗末に扱うようになった。五谷神は大いに怒り、老鼠に食糧を全て取り戻すように命じた。懲罰を受けた人間たちが、毎年五谷神の誕生日（5月25日）に《跳五神》を演じて五谷神に謝罪することによって、五谷の種子は人間に戻ってくるという。

以上の演目についていくつかの要点を述べる。《跳幡僧》は、戯曲『西遊記』と、儺戯に現れる開山（開路神）と、弥勒が混交したものであり、顧の指摘の通りそこには仏教色が見出される。また、この演目は楽器の演奏を伴った行列でもあることがわかる。《跳八馬》は弥勒を除いてすべて獠猛な面を被っていて、顧はこの演目は巫道の色彩が強いと述べている。将石村の表演時に、24人で編成される“神鼓隊”がつくが、これは楽隊を伴った行列であると考えられる。《跳弥勒》は明らかに江西省南豊県の儺舞《儺公儺婆》の型である。《儺公儺婆》は儺公と儺婆が情愛のこもった仕草をし、人形を赤ん坊に見立ててかいがいしく世話をやくという内容である。これが、弥勒公、弥勒婆と呼ばれていることから弥勒と子孫繁栄の信仰が結びついていたと考えられる。《跳五神》に現れる、人間に手渡された<五穀の種子>からは、黒島のミルクの<五穀の種子>の受け渡しの儀式が類推される。

これらの福建省の例からは、ミロクが単なる仏教の信仰上のミロクではなく、儺の信仰にも取り入れられ芸能化されていたということがわかる。これらの儺儀の一部に現れる仮面神・弥勒は、仮面の形態、およびその一行が楽器を演奏しながら行列することからも、<行列するミルク>との類似が見出される。

《跳弥勒》の弥勒公は、腹部を“大肚子”で覆い、手にはちりはらい、あるいは破葵の扇を持つというが、腹部を作りものの腹で覆う姿は沖縄本島中南部のミルクと同じ姿である。

このように、<行列するミルク>と類似の弥勒が福建省に存在することから、既に<行列するミルク>として、ミルクが伝わってきたと考えられなくもない。しかし、儺儀に現れる仮面神・弥勒と、ミルクとの関連については、現在のところ資料不足であり今後の課題と言えよう。

## 2) 元宵祭の大頭和尚

儺の行事に現れる仮面神・弥勒以外に、僧の仮面を被ったものが先頭になり行列をするという芸態と類似した中国の芸能についてみていきたい。東恩納寛惇<sup>16</sup>は、「幕と蚊屋」の中で、ミルクは布袋であり、その姿は福建の大頭和尚を模していて、元宵祭ではこの大頭和尚と獅子が行列を



行なつたと述べ、さらに次のように記している〔東恩納 前掲 P256〕。

これは福州の元宵祭の大頭和尚をそのまま輸入したもので、この踊のテーマ音楽がピーラーと称する唐楽である。その楽手は西原間切の掛保久村から出る事になっているが、西原は真和志・南風原と共に、大美御殿（王家の内局）の御掛島（直領）であった関係からである。

琉球王朝時代、那覇浮島には中国人が住みつき、久米村（くにんだ）と呼ばれる地区を形成していた。久米村の住人は「閩人三十六姓」と呼ばれたが、この久米村の人々の間に、元宵祭で福神を迎える行事が行なわれていた。矢野輝雄によると、久米村の元宵祭は、趣向を凝らした灯籠を門戸に吊るし福神を迎える行事であり、後世は神仏に供する習慣となったという〔矢野 2003 P256〕。羽地仕置には正月16日の灯籠見物に対する取締令が出ており、さらに球陽尚敬紀17年の条にも久米村の元宵祭の飾り物を簡素にするという指令が出されている〔東恩納 前掲 P252〕。このような取締令が出たことから、久米村の灯籠祭の賑わいがうかがわれる。

中国では正月十五日を「上元節」と称し、その夜を「元宵」と呼んで、灯籠まつりが行なわれた。『中国の年中行事』〔中村 1987 平凡社〕によると、「それは、数日にわたる盛大なもので、家々の門前や道路には、紅幕や趣向を凝らした色鮮やかな灯籠が飾られ、街には竜や獅子などの形をした「行灯」と称する灯籠が練り歩く。この夜ばかりは古来夜行が許され、灯籠見物の人々で賑わった」〔中村 1987 P17〕という。この元宵祭は宋代も盛んで、杭州（浙江省）・蘇州（江蘇省）・温州（浙江省）の提灯が特に盛大華麗であったという。南宋の都杭州ではさまざまな舞隊が生まれ、夜を徹し蜿蜒と街を練り歩くさまが目をひいたという。

灯籠祭に現れる「福州の元宵祭の大頭和尚」が、ミルク行列の原型であると東恩納は述べているが、では、「福州の元宵祭の大頭和尚」とはどのようなものなのであろうか。アジアの多くの仮面を所蔵する奈良県の天理参考館には、大頭和尚の仮面が収蔵されている。筆者は、大頭和尚の仮面を見せていただいたが、それは頭からすっぽり被る張子の仮面であった。『変貌の道具 仮面』〔天理参考館編集発行 1980年〕の解説によると、元宵節の頃になると市中にこうした仮面が売り出されるという。この仮面を被った踊りは特に揚子江下流地方が盛んで、子供たちがドラや太鼓の囃子に合わせながら各戸の門前で猥褻滑稽なしぐさを大っぴらに、面白おかしく踊り、祝儀を貰う習俗があったという。

横浜中華街と神戸南京町の旧正月に行なわれる行事に、僧の仮面の人物が現れる。横浜の中華街では国慶節や旧正月に、獅子舞や竜舞いが行なわれる。中華街の商店主によると、ここの獅子舞は北方系なので、男の子と女の子がつくが、竜舞いときには玉を持った“ほうさん”が竜をじらしながら先頭になって現れ、各家から寄付金を貰って歩くという。

神戸の南京街では旧正月に獅子舞が行なわれるが、僧形の仮面を被った人物が獅子をじらしながら現れる。この仮面もすっぽり被る張子の仮面である。このように、獅子や竜の相手役として現れる僧形の仮面を被った人物は、大頭和尚のヴァリエーションと考えられる。

獅子舞は中国、日本に広く分布している芸能であり、しばしば、獅子の相手をする人物が現れ

る。『中国面具史』〔前掲〕の「福建儺舞及其面具」の項によると、福建省の八閩大地一帯にも、獅子は「郷人儺」として分布している〔P352－P354〕。

沖縄におけるミルクと獅子の関係は今後の課題であるが、筆者は、〈除災招福の神〉として琉球に伝わったミルクと獅子は、豊年を祈願し、悪疫を払う芸能であったが、いつしかミルクはくユーを招く〈豊穰の神〉と考えられ、獅子は〈祓い清め〉の神と考えられるようになったのではないかと考える。

元宵祭の大頭和尚と、そのヴァリエーションと考えられる竜や獅子の相手になる仮面の人物は、〈行列のミルク〉とすべての面で類似しているわけではない。しかし、これらの人物が、僧形であり、楽隊が従う行列という芸態、そしてこれらの象徴する〈遊戯性〉などの特徴は、〈行列するミルク〉と共通していると考えられる。

### 第三章 舞台に現れるミルクの例 — 竹富島のミルク神 —

本章では、〈舞台に現れるミルク〉として、八重山諸島の竹富島の種子取祭に現れるミルクについて記す。まず、祭の中でミルクがどのような役割を果たしているのか、竹富島のミルクがどのような特徴をもっているのかみていきたい。

前章では、行列するミルクを、ミルクと類似の中国の芸能から考察した。本章では、なぜミルクが舞台に現れるのか、中国の伝統演劇との関係から考えたい。また、ミルクの芸態には、中国文化を模した沖縄本島の芸能の影響も見られることを指摘したい。

#### 第一節 種子取祭のミルク

竹富島は石垣島の正面に位置する周囲9キロメートルあまりの、<sup>はざま</sup> <sup>なかつじ</sup> 玻座間と仲筋の二つの集落からなっている川も山もない島である。世帯数約130戸、人口約300人でサンゴの敷きつめられた白い道に赤瓦の伝統的な家屋が映える。この島は、島全体が町並み保存に指定され、過疎化と高齢化の進む八重山諸島の島々の中で、島民自身による観光化で活性化している島である。

稲や粟の種を蒔き、無事に育つことを祈願する行事を種子取（タナドゥイ、タントリ）と呼ぶ。竹富島では種子取祭を最も重要な年中行事として盛大に行っている。現在、竹富島の主な産業は観光だが、種子取祭の各行事は古来の儀式に則って行われ、国の重要無形文化財となっている。

この行事は、旧暦九月から十月にかけての甲申の日以降に行われる。この祭りが最高潮に達するのは、七日目、八日目であり、二日間にわたって70種目の芸能が<sup>きのえきる</sup> 世持御嶽で演じられる。七日目の夜にはユークイが行われ、島には銅鑼と太鼓が響きわたり、人々は神司を先頭に古謡を歌いながら家々を廻る。本論の調査は、2002年と2003年の種子取祭に行なった。

##### 1) 「ミルク起こし」の儀式

七日目、八日目の二日間にわたって芸能が世持御嶽で演じられる。七日目の早朝、カンツカサたちはまず自分の属する御嶽で願ってから、<sup>はざま</sup> <sup>うたき</sup> 玻座間御嶽に集合して願いをし、最後に種子取祭の会場となる舞台の前の世持御嶽に移る。

玻座間御嶽でカンツカサたちが祈願をしている間、午前6時頃から弥勒奉安殿で「ミルク起こし」の儀式が行われる（世持御嶽と弥勒奉安殿は同敷地内にある）。弥勒奉安殿の扉が開かれ、ミルクの仮面とゲンバイが飾られ、蠟燭がともされ、祭壇へ供物が供えられる。弥勒奉安殿の入り口に役員、弥勒奉安殿の下ゴザの上には26人の男性が座り、祈願が行われる。一礼二拍一礼をして祭壇の膳をおろすと、給仕の女性二人が膳のニンニクとタコを皿にとり配る。

上の段に座っている公民館長と主事が、順に御神酒と杯の膳を回す。膳をもらうと一礼をして、手酌で飲む。そのあと御神酒は右から左に全員に回る。ミルクにさし上げる神酒は泡盛で、御嶽にはどぶろくをさし上げるという。食べ終わると、一行は世持御嶽に移る。種子取祭の奉納芸の中で仮面を付けて現れるのは、このミルクと猿、鬼があるが、仮面を被る前に神事が行われるのはこのミルクだけである。

「ミルク起こし」を終わった役員、長老たちは、世持御嶽の入り口に移動して、玻座間御嶽での拝みを終えたカンツカサたちと合流し、「バルビルの儀式」を行う。バリビルとはニンニクのことで、ニンニクが割れるように種子が発芽しますようにと祈る。

## 2) 舞台に現れるミルク

二日間にわたる種子取祭の奉納芸能は、庭の芸能と舞台の芸能に分かれる。舞台の芸能は、男性による狂言（キョングン）と女性による踊り（ブドゥイ）に大別することができる。狂言とは、女性の踊りに対して、物語性ないし儀礼性のある劇である。狂言には決して女性は出演しない。女性の役は男性が演じる。最初に行われる狂言<sup>17</sup>（初番狂言）、また、必ず行なわれなければならない狂言や踊りなどは決まっている。これらの狂言は、主として農作物の播種・成育・除草・収穫までの過程を表している。

竹富島の奉納芸能は、初日の前踊り（主に玻座間地区）と二日目の後踊り（主に仲筋地区）に分けられる。舞台の芸能は両日とも、「長者（ホンジャー）」と「弥勒」の演目が冒頭に演じられる。このことから、両者とも、舞台の冒頭の演目として特別な扱いを受けているのがわかる。狩俣はホンジャーについて、「種子取祭の舞台芸能の始まりに際して、名乗りと豊作の祈願をした後に、村の役人に対して奉納芸能の許可を願い出て、その開始を宣言する。つまり、ホンジャーとは沖繩諸島の長者の大主と同類のもので、本土の翁の流れを汲む神事的な芸能である」〔狩俣 前掲 P173〕と述べている。

ホンジャーが口上を述べて退場すると、笛と太鼓による「ミルク節」の演奏が始まり、ミルクが登場する。舞台で歌われる「ミルク節」には三線の伴奏はない。この演奏形態は竹富島では「ナナツガニ」<sup>18</sup>と呼ばれる。ミルクは黄色い着物を着て、帯を前に結び、手には杖と軍配を持っている。ミルクのまわりには子供たちが従う。子供たちの後には、白い上下の服に白いハチマキ、黒いチャンチャンコを着た男たち四人が従う。次に「五穀の種子の載った盆」（実際には粟しか見えない）と椅子を持った袴姿の男が従う。次に黒の袴姿の男たちが、福という文字が書かれた旗、鞠、扇子、草履、下駄、三角旗をもって従う<sup>19</sup>。最後に少年が鐘をつきながら従う。

一行はゆっくりと「ミルク節」に合わせて舞台を一周する。お供の男たちの足はこびは、4拍

の間に以下の動作を行なう。①右足を一步出して、②後ろの左足のかかとを上げて戻す、③膝を曲げる、④膝を延ばすが、そのとき右足がわずか前進する。次に前述の動作を左足から行なう。ミルク節の囃子の「サーサー」で、その場で足を力強く踏みしめながら一回まわる。

舞台を一周したミルクは幕に向って椅子に坐る。“五穀の種子の載った盆”を持つ男たちは、その盆を下ろし、御嶽に向って手を合わせてから自分の場所まで歩き坐る。黒いチャンチャンコを着た4人の男たちは、子供たちを坐らせ、一度、幕の向うに戻ってから、再び登場し、ミルクの前でシーザブトイを踊る。シーザブトイは空手の型のようなものを「ヤレコノ節」のメロディに合わせて踊るものである。シーザブトイが終るとミルクは立ち上がり子供たちやお供を引きつけて退場する。退場のときにも「ミルク節」が演奏される。

### 3) 竹富島のミルクの特徴

ここでは、竹富島のミルクがどのような特徴を持っているのかを考えたい。竹富島のミルクは舞台に現れるだけである。では、沖縄において祭りの舞台とはどのようなものと考えられているのであろうか。大城は、元来、舞台様式というものは、基本的には次のような要素を有しているという〔大城 前掲 P60〕。

- ①舞台と客席を仕切る幕がない。
- ②舞台と楽屋を仕切る幕がある。幕のすぐ後方は<sup>じかた</sup>地方席となる。
- ③舞台の演者の正面、つまり、客席の正面後方には、御嶽の神の在所でもっとも聖なる場所のイベ<sup>いべ</sup>がある。

「よって、舞台で繰り広げられる芸能は、村人に健康や幸せを授け、豊穡をもたらしてくれる神(村落の守護神)に見せるために上演されるのである。村踊りの芸能がことさらに<奉納芸能>と称されるゆえんである」と述べている。

上述の大城の説明からは、人々の意識の中では舞台自体が聖なる場と考えられていることがわかる。竹富島波照間集落の踊の師匠でもある喜宝院の院主・上瀬頭<sup>うえせ とうともこ</sup>同子さんは竹富島の舞台について次のように語ってくれた。

竹富では舞台という意識はないです。便宜上舞台といっていますが、決して舞台ではなくて、供物を捧げる供物台です。踊りの練習のとき、カンクモツ(神供物)の準備をするといっています。カンクモツは踊りのことで、神様に捧げる供物なんです。老人が多くなって労力が出せないで、今は世持御嶽の中に舞台が造ってありますが、あれは本当は舞台とはいいません。供物台です。

舞台は単なる舞台ではなく供物台だという考え方からは、舞台が神聖な場であるという意識が強くうかがえる。竹富島のミルクが舞台だけにしか現れないという事実は、ミルクは神聖な場にしか現れないということを意味している。竹富島の人々が、波照間島の<行列するミルク>を“あそびミルク”と評するが、それはこのような理由からであろう。

「ミルクは以前は與那國家<sup>よなぐに</sup>にあったが、與那國家の当主が仕事の都合で島を出てしまったので、世持御嶽の前の広場に弥勒奉安殿を作って安置している。だが、與那國家の長男は、種子取祭に

は必ず帰ってきてミルクの役を演じる」と島の人は言う。阿佐伊孫良（竹富島前公民館長 67代）さんによると、竹富島にはミルクについて次のようなしきたり等があるという。

- ① 與那國家長男が面を被る。大山家長男が段取りをする。衣装を着けるときの厳格だ<sup>21</sup>。
- ② ミルクには女は近づけない。ミルクの神は女なので、女がそばに来るとヤキモチを焼くといわれている。
- ③ ミルクに関係するのをミルクツカサという。ミルクツカサの與那國家、大山家は島の実力者だった。
- ④ ミルクにかかわっている人は玻座間の人で、本来は玻座間中心だったが、恐れ多いので今では島全体で祀っている。だから、シーザブトイは玻座間の人達によって踊られる。ミルクの前で踊るシーザブトイの4人はミルクをお守りする役だ。
- ⑤ 昭和40年代に最初のミルク奉安殿ができた。それがぼろぼろになったので、平成のはじめに今のミルク奉安殿が作られた。

大正時代の種子取祭では、ミルクは玻座間村のみの神とされており、仲筋村はシドゥリヤニを奉納したという〔狩俣 前掲 P190〕。玻座間集落の神であったミルクが、竹富島全体の神になったのは、実はそれほど昔の事ではなかったということがわかる。現在、ミルクは「弥勒奉安伝」に祀られているが、奉安殿とは天皇皇后の御真影を保管していた建物であり<sup>22</sup>、ミルクを祀る建物を奉安殿と名付ける発想事態が、ミルクを非常に権威のある神として位置づけていることがうかがえる。

ミルクに関係する與那國家、大山家が島の有力者であったことから、ミルクは非常に家の権威と結びついた神であることがわかる。沖縄の祭祀は、オナリ信仰<sup>23</sup>や御嶽信仰に基づいていて、基本的には女性が中心であるが、ミルクは男性の祭祀である。つまりミルクは男性社会に受容された比較的新しい外来の神と考えられる。

## 第二節 中国の祝祭演目との関連から

ミルクが舞台で行っていることは、<行列するミルク>と同じ事を舞台上で行っているとも考えられるが、ここでは舞台にミルクが現れるという現象に注目したい。まず、舞台に神が登場した例を琉球の記録からみていきたい。琉球では御冠船の芸能<sup>24</sup>に福神が現れた記録が残っている。ここでは、御冠船の芸能に現れた福神について述べ、次に中国の伝統演劇に現れる福神について述べる。次にこの福神が、現在、祭りに現れるミルクとどのような関係なのかを考えたい。

### 1) 御冠船の芸能に現れた福神

1404年以来、慶応2年（1866）まで、中国の冊封使派遣は22回に及んでいる。冊封使は約半年間宮中に滞在し、その間、迎風宴、事竣宴、中秋宴、重陽宴、冬至宴、饞別宴、登船宴などの宴でもてなされた。宮廷はこの接待の為に踊奉行を設け、士族の子弟に歌舞音曲を仕込んだ。宮廷で行なわれた歌舞については、冊封使の報告書、諸使録の中に記述が見出される。これら冊封使の記録の中に、御冠船の芸能に福神が現れた記録が残っている。

矢野は、17世紀後半から宮廷で福神の仮装をして演舞する芸能が存在していたことを、1663年、1683年、1719年、1838年に来島した冊封使の記録から指摘している〔前掲 P481～P484〕。さらに、矢野は冊封使録と戊の冠船台本から、福神を表わしていると考えられるこれらの仮装の人物を、時代によって整理して、次のように述べている。〔前掲 P484〕。

寿星に扮した老人が歴史的に古く、時代が下がると天孫子や大黒天なども冠船に仮装人物として登場する。東方朔のように中国の伝説上の人物も現れるが、冊封使録を通してみると寿星が最も頻度が高い。また、雪舟の絵の物語るように、天孫子と見られたものが本来は寿星の側近人物であるとする、始終寿星老人が中心になっていると考えられる。冊封使や王の万歳を祝う歌詞からしてこのような結果となるのであろう。

では、宮廷で行なわれた寿星はどのような演目であったのだろうか。徐葆光の『中山伝信録』<sup>25</sup>によると、寿星は、神歌、太平ノ曲について演じられ、「楽工十四人の梵唄風の唄に合わせて、仮面を付けた寿星が出て三拝、手をもみ、起って舞い、舞い終わり、また三拝して止む」〔本田 前掲 P328〕というものであった。

矢野は沖縄における寿星信仰について、『おもろさうし』の「星」についての記述を調べた結果、この星を瑞星とする考え方が庶民には縁遠いものであったと述べ、「冠舟の寿星も、久米村の唐栄の人か、冊封使を迎える首里の士族たちの教養、ないしは中国の人達の知識に支えられたものであったと見てよいのであろう」〔矢野 前掲 P488〕と述べている。

しかし、首里の士族たちの教養、ないしは中国の人達の知識に支えられたとしても、なぜ「冠船」の芸能には頻繁に寿星が登場したのであろう。

## 2) 中国伝統演劇の上演形態

光緒十九年(1893)の恩賞日記の、慈禧太后六旬大寿時に準備された仮面については既に記したが、230個の仮面のうち寿星套頭(寿星の仮面)は120個であり、最も多かった〔顧 前掲 P260〕。寿星がどのような役割を果たしたのか、その詳細は不明である。しかし、中国の伝統的な民間演劇からその役割を垣間見ることができる。

有澤晶子は「中国伝統演劇の上演形態にみる祭りの形跡」<sup>26</sup>のなかで、祝祭演目としての八仙について次のよう述べている〔有澤 2003 P3〕。

上演形態において、本演目以外に、常に決まって頭に置かれる演目には、儀礼的な上演意図が示唆される。それは演劇の形成とその存在意義を示す役割を担っている。そのような観点で各地の地方劇を見てみると、まず八仙が登場する演目をあげることができる。

八仙の登場する演目には、しばしば福祿寿の三星が登場する。有澤は、安徽省の徽劇を挙げて、徽劇では、正演目を行なう前に、福、祿、寿の三星が登場し、「万福来朝」という「神腔」を斉唱すると述べ、そのあと八仙の舞いと「八仙祝寿」が演じられ、本演目になると述べている。さらに、江蘇省の京徽班や昆劇でも、「五星賜福」や「三星上寿」「五星上寿」が行なわれるという。

田仲一成は、『中国郷村祭祀研究 地方劇の環境』〔田仲 1989 東京大学出版会〕の中で、神誕祭祀<sup>27</sup>は、宗教儀礼から演劇への転化を促進する役割を果たしていると述べ、「事実、現在、祭祀

演劇における開演冒頭の儀礼慶祝演目は、おおむね、神誕演劇の場から生れたものである〔田仲 1989 P781〕と述べている。田仲は、そのうち最も代表的な演目である〈八仙賀寿〉を紹介している。

これは、西王母の誕辰に当たり、八仙が視寿に出かけるという筋である。ここで歌われる『皴口小条』の冒頭は次のような歌詞である〔田仲 前掲 P782〕。

嘆八仙

年々有一個三月三	年々訪れる三月三日
王母娘娘慶賀寿誕	王母娘娘（さま）の寿誕慶賀（めでたし）。
有一位寿星老率領着衆八仙	寿星老人，八仙の衆を引きつれ，
福祿寿共羣仙	福祿寿三星と連れ立ちたる仙人達。
同赴蟠桃筵	ともに蟠桃の筵に出かけゆく。

田仲は、さらにシンガポールの中元建醮で法事期間中に行なわれる福州劇について述べ、福祿寿の三星の現れる冒頭の祝寿演目「福祿寿」を紹介している〔田仲 1989 P319〕。

このように、中国の祭祀演劇では、冒頭に福祿寿の三星が現れる祝寿演目が存在したことがわかる。冠船の最初の演目に寿星が登場したのは、このような中国の祭祀演劇を模したのであろう。矢野は冠船に登場した福神は、始終、寿星老人が中心になっていると指摘しているが、実は寿星は中国祭祀演劇の冒頭に登場する重要な役なのである。

### 3) 布袋とミルク

冠船芸能は、後に村芝居の中に取り入れられ、現在の村芝居の形となったといわれている<sup>28</sup>。しかし、各地の村祭に現れる福神は、ミルクないし福祿寿（三星ではなくて一人の福祿寿）である。しかも、福祿寿が登場するのは、多良間島の「八月踊り」と八重山諸島小浜島の結願祭のわずか二例である。実際には、小浜島の福祿寿は北部落のメーラク（ミルク）に対して、昭和の初めに新しく作られた福祿寿である。多良間島の福祿寿は面を付けず、ヤマト言葉で舞台冒頭の挨拶をする。つまり、沖縄の村芝居では、開演冒頭に現れる仮面神はもともとミルクだけだったと考えられる。

中国の祭祀演劇の冒頭に福祿寿の三星が現れる祝寿演目が、御冠船に取り入れられ、その形式が〈ムラアシビ〉に伝播した。しかし、福祿寿の三星の代わりに登場したのは殆どミルクだった。これはどうしてなのだろうか。これは、「ミルクは布袋である」「ミルクの姿は布袋を模した」などといわれていることに起因すると考えられる。

ミルクは布袋の形をとっているといわれている。では、布袋が弥勒の下生であるとする信仰がどのようにして起こり、普及したのであろうか。宮田は布袋について次のように述べている〔宮田 前掲 P81 - P82〕。

『景德伝灯録』によれば、長汀子すなわち布袋和尚は、明州奉化県の人で、唐末に出現した。その形は、ふやけ太り巨腹で、常に杖を持ち、大きな布袋をかついで放浪していた。市や村の家々を訪れ、物を乞い、食物を貰うと全部を食べないで、残りの部分は袋の中に入れておく、

梁の貞明3年(917)、ちょうど唐が滅んで10年後に入滅した。辞世の偈に、

弥勒真弥勒 分身千百億 時々示時人 時人自不識

とある。すなわち弥勒は現世に時人が知らぬ間に姿を現すことを予言している。

宮田によると、布袋は、この長汀子の他に三人実在したと伝えられるという。宋に僧了明、元に布袋、元末に棗陽張氏の男で、ともに巨腹で布袋を荷うというシンボリックな姿であって、人々はこれを布袋とよんでいたという。

中国では布袋は、弥勒仏の一形態として扱われている。姜忠信の『仏陀尊像故事』<sup>29</sup>弥勒の部では、弥勒仏坐像、弥勒三尊、椅坐弥勒如来、後脚坐弥勒、遊戯坐弥勒、弥勒(布袋)立像、弥勒如来与四金剛が紹介されているが、そのうち、弥勒(布袋)立像、弥勒如来与四金剛の弥勒は布袋である。著者の姜忠信は、布袋の弥勒は、完全に中国化された弥勒の造像であると記し、さらに次のように述べている。

世人認定布袋和尚即为弥勒化身，遂因其形，以其形塑造弥勒併成定式，到了宋代大肚弥勒形象已很普遍。明太祖朱元璋更令全国寺院造大肚弥勒已併置于入門处（天王殿）

（世の人は、布袋和尚が弥勒の化身であると認め、それ以降、その形を弥勒とするのが定式化され、宋代には大肚弥勒の形は普遍的になった。明の太祖朱元璋は、全国の寺院に弥勒を天王殿に併置するよう命じた）

しかし、太った福々しい弥勒像はタイにもあるので<sup>30</sup>、果して太った福々しい弥勒像が「布袋和尚は弥勒の化身」という伝承から起ったのかどうかはわからない。布袋の形をした弥勒像は、南中国、台湾に多く見られる。上述の朱元璋は、民衆叛乱である紅巾軍の一武将であり、1368年、明王朝を建てた人物である。このときの民衆叛乱の精神的支柱となったのが白蓮教であった。白蓮教には、弥勒下生の信仰も取り入れられているといわれる。このように中国では、「布袋和尚は弥勒仏」と考えられていて、その信仰をさらに広めたのが明の太祖・朱元璋であり、布袋は弥勒であるという信仰は南中国に特に盛んになった。

弥勒が布袋であるということは、本土でも既に室町時代から知られていたが、それ以上に、布袋は福神として信仰されていた。矢野は、「沖縄の福神信仰の歴史も日本の影響が大きい」〔矢野前掲 P489〕と述べ、七福神としての布袋の信仰もあったと述べている。沖縄の福神信仰における、布袋と弥勒の混淆について矢野は次のように記している。

中世の福神信仰は沖縄まで及び、中国からの寿星信仰と重なり合い、首里王府や寺院を中心に行なわれ、時代を下るにつれて、その変貌した弁財天・夷・福祿寿などが、上下を問わず信仰を集めたことがわかる。そこでは南中国からの寿星信仰や土着の長者の大主・天孫子などと習合しながら定着し、時代とともに福神本来の意義が忘れられて、福神と弥勒信仰の重なりの上に、弥勒と布袋との混淆が生れたと見ることができる〔矢野前掲 P493〕。

矢野は、「福神と弥勒信仰の重なりの上に、弥勒と布袋との混淆が生れたと見ることができる」と述べているが、沖縄の人々が布袋を模したミルクを舞台上に登場させたのは、「弥勒と布袋との混淆」があったため、寿星の代わりにミルクを舞台上に登場させたのであろう。このようにく舞台の



ミルク>は、中国の祭祀演劇の冒頭に福禄寿の三星が現れる祝寿演目の伝統を受け継いでいると考えられる。

### 第三節 中国文化を模した芸能の影響

#### 1) 唐人行列芸

竹富島のミルクの演目とよく似た芸能が、沖縄本島南部の東風平町<sup>こちんだ ともり</sup>富盛の十五夜行事にある。富盛の十五夜行事では、昼の部の行列で「唐人行列」と「大和人行列」が行なわれる。この「唐人行列」の構造が竹富島のミルクの芸態と類似している。「唐人行列」について記す<sup>31</sup>。

1. 唐人行列の出演者は次の順で行進する。

アウー（唐語で老公）→按司（唐語で大相公：王様）→お供（子供）→御涼傘持ち→椅子持ち→トディー（空手 4人）→パーエー（歌いながらパーランターを打つ者、歌いながら鉦を打つ者 2人）→（空手 4人）→ガク吹奏者（2人 哨呐）。

2. 行列の内容

- ①アウーを先頭にパーエーをうたいながら広場を一周し、元の位置に整列。このときガクも演奏される。
- ②アウーが数歩前に出て、ドラを3回打ち「アウー」と叫びまたドラを3回打つ。
- ③王様が前へ数歩出て椅子に腰掛ける。
- ④空手2名が前に出て空手を披露する。終ると王様はハウリョウという。
- ⑤次の空手2名が空手を披露する。終ると王様はハウリョウという。
- ⑥次の空手2名が空手を披露する。終ると王様はハウリョウという。
- ⑦次の空手2名が空手を披露する。終ると王様はハウリョウという。
- ⑧アウーが数歩前に出て、ドラを3回打ちアウーと叫びまたドラを3回打つ。
- ⑨アウーを先頭に、王様、お供、椅子持ちが続き、空手、パーエー、ガクと続き、パーエー、ガクをならしながら退場する。

王様は右手にグンパイを持ち、空手の演者は、白のハチマキ、黒い長袖上着に黒ズボン、両腕は袖に隠し前で組んでいる。なお、歩き方は独得の歩き方である。登場と退場のときに演奏されるガクは路次楽のことであり、赤田のミルクと同様、中国の楽器を使用したものである。富盛の「唐人行列」の起源と伝来については不詳であるが、村芝居の起源は17世紀頃と推測されるという。

昭和以前、空手は唐手と称された。『近代唐手道の歴史を語る』<sup>32</sup>によると、「琉球の唐手術は、中山王の時代に渡来した福建人三十六姓の人たちが浮島（旧久米村・現那覇市）に持ち込んできたもので、明治維新前までは久米村に住む人の特技だったと言われていた」という。唐人行列で空手の型を披露するのは、空手（唐手）と中国文化が当時の琉球の人々にとっては結びついていたからであろう。

竹富島の舞台のミルクも、お供を連れて行列してきたミルクが椅子に坐り、シーザブドイという空手の型を模したと思われる踊りを見て、再び行列して戻っていく。阿佐伊さんは、「ミルクの

前で踊るシーザブトゥイの4人はミルクをお守りする役だ」と語ったが、竹富島のミルクの芸態は、上述の「唐人行列」と構造的には同じものと考えられる。

### 結語：ミルクと中国芸能

ミルクとその芸能は、琉球王朝下に伝わっていたミロクの信仰と、中国のさまざまな芸能が融合してできたものであり、首里から沖縄中南部の各地に広まり、さらに“士族のもたらす新しい神”として八重山諸島に広まったと考えられる。

ミルクの基本的な芸態は、〈行列すること〉と〈舞台に現れること〉である。ミルクの芸態には中国の芸能の影響が見出せるが、ミルクの芸態に類似の、あるいは影響を与えたと考えられる中国の芸能は必ずしも一つではない。本論では、〈行列するミルク〉として波照間島のムシャーマに現れるミルク、〈舞台に現れるミルク〉として竹富島の種子取祭に現れるミルクの例を述べ、これらのミルクの芸態と類似、あるいは影響を与えたと推察される中国の芸能を具体的に示した。これらの芸態は下記のとおりである。

#### ① 儺の行事に現れる仮面神・弥勒（類似した芸能）

中国では、仮面の神が祭りに現れ、除災招福を目的とした行事として儺の行事がある。福建省では儺の行事に仮面神の弥勒が現れる。これは仏教の弥勒仏が、地域の民俗信仰と結びついて儺戯に現れる神の一員となったものである。福建省邵武市の儺の行事では、弥勒が先頭となり、楽器を演奏するものを従えて行列が行われる。

#### ② 元宵祭の大頭和尚の行列（類似した芸能、影響を与えたと考えられる芸能）

ミルク行列にはしばしば遊戯性が強く見出される。このように遊戯性の強い行列で、僧形のものが先頭となる行列は、大頭和尚の現れる元宵祭の行列である。また、獅子舞や龍舞いに獅子や竜の相手役として僧形の仮面を被った人物が現れるが、これらの人物も大頭和尚のヴァリエーションと考えられる。

#### ③ 中国の祭祀演劇における開演冒頭の祝福演目（影響を与えたと考えられる芸能）

ミルクが舞台上がるという形式に影響を与えたものとしては、中国の伝統演劇における開演冒頭の儀礼慶祝演目が考えられる。この儀礼慶祝演目に福祿寿の三星がしばしば現れる。琉球ではミルクと福神信仰における布袋との混淆がみられるため、舞台には寿星の代わりに布袋の姿のミルクが現れたと考えられる。

#### ④ 〈中国文化を模した沖縄本島の芸能の影響〉（類似した芸能）

竹富島種子取祭のミルクの芸態は、中国文化を模した沖縄本島の芸能の影響を受けている。

本論では、八重山諸島のミルクの事例のみを述べたが、上記①～③の結果からもわかるように、ミルクの芸態には中国の芸能の影響が色濃く見出される。さらに④からは、竹富島のミルクが沖縄本島の中国風の芸能まで模して、中国風の芸態にこだわっていることがうかがえる。では、なぜミルクは中国風の芸態にこだわったのであろうか。

本論で既に指摘したが、ミルクは首里から赴任してきた士族の伝えた仮面神であり、また芸能と考えられる。ミルクが伝わった頃、すでに八重山諸島には、アカマタ・クロマタのような仮面草装の神や、マユンガナシのような草装の神の祭りがあった。そしてこれらの祭祀は“不宜風俗(よくない風俗)”としてしばしば首里王府から禁止されていた<sup>33</sup>。これらの従来の神に対して、士族の伝えた新しい神ミルクは、従来の八重山諸島の神々とは明らかに異なっていることを強調しなければならなかったと考えられる。そのために、ことさら中国風の芸態にこだわったのであろう。また、支配者が新しい神ミルクを広める際、中国に由来する神であると示す事は、ミルクにとって最高の権威付けになったに違いない。

## 引用文献

- 有澤晶子 2002年 「中国伝統演劇の上演形態にみる祭の形跡」『アジア文化研究プロジェクト Vol.13』 学習院大学東洋文化研究所 アジア文化研究プロジェクト事務局 P3
- 安里 進 2002年 「琉球文化圏と琉球王国の形成」 赤坂憲雄 中村生雄 原田信男 三浦佑之 『日本を問いなおす』 岩波書店
- 大城 學 2003年 『沖縄の祭祀と民俗芸能の研究 弧琉球叢書6』 砂子屋書房
- 狩俣恵一 2003年 『南島歌謡の研究』 瑞木書房
- 喜名盛昭, 岡崎郁子著 1992年 『沖縄と中国芸能』 ひるぎ社
- 宜野湾市教育委員会文化課編集発行 2001年 『村芝居一ぎのわんのムラアシビ』
- 儀間真謹 藤原稜三 1986年 『対談 近代空手の歴史を語る』 ベースボール・マガジン社
- 窪 徳忠 1997年 『窪徳忠著作集4 沖縄の習俗と信仰』 第一書房
- 田仲一成 1989年 『中国郷村祭祀研究 地方劇の環境』 東京大学出版会
- 天理参考館 1980年 『変貌の道具 仮面』 天理大学出版部
- 中村喬 1988年 『中国の年中行事』 平凡社
- 那覇市企画部市史編集室 1979年 『那覇市史 資料編 第2巻中の7 那覇の民俗』 那覇市企画部市史編集室
- 原田禹雄 2003年 『琉球と中国 忘れられた冊封使』 吉川弘文館
- 東恩納寛惇 1980年 『東恩納寛惇全集8』 第一書房
- 平敷令治 1990年 『沖縄の祭祀と信仰』 第一書房
- 廣田律子 2000年 「中国の仮面一呪力を備えたまなざし」『アジアの仮面』 大修館
- 外間守善:校注 2000年 『おもろさうし』(上・下) 岩波書店
- 本田安次 1998年 『南島文化叢書13 沖縄の祭りと芸能』 第一書房
- 宮田 登 1993年 『ミロク信仰の研究』 未来社
- 矢野輝雄 2003年 『組踊りを聴く』 発行所:瑞木書房 発売所:慶友社
- 湧上元雄 2000年 『沖縄民俗文化論 祭祀・信仰・御嶽』 榕樹書林

## 中国語文献

姜忠信 2003年 『仏陀尊像故事』 宗教文化出版社

顧朴光 1996年 『中国面具史』 貴州民族出版社

## 註

- 1 大城學は『沖縄の祭祀と民俗芸能の研究』〔大城 2003 砂子屋書房〕の中で、弥勒について次のように述べている〔前掲 P912〕。

弥勒の芸能や歌謡からして、弥勒は常世国<ニライカナイ>から来訪すると人々は考えているのである。元来、仏教で説く弥勒菩薩は、特に農耕と関係があるわけではないし、遙か彼方海からやって来るともいっていない。しかし、現実には沖縄では、弥勒は海の遙か彼方から五穀の実りをたずさえて来訪する神と考えている。つまり固有の常世神信仰の上に、弥勒出世の信仰が重なったのである。
- 2 筆者は本土という言葉を使用したくないが、従来の研究者の研究紹介においてこの言葉を使用する。
- 3 本田安次 1998年 『南島文化叢書 13 沖縄の祭りと芸能』 第一書房
- 4 外間守善：校注 2000年 『おもろさうし』(上・下) 岩波書店
- 5 『おもろさうし』〔前掲〕の注による。
- 6 沖縄における念仏の初めは、『琉球国由来記』巻四には、明の万暦年間、尚寧王世代(1589～1620年在位)、浄土僧袋中が渡来して仏教の文句を俗にやわらげ、はじめて那覇の人たちに伝えたのが念仏の初めであるとある〔本田 前掲 P124〕。似念仏というからには、盆の行事として、このような念仏が唱えられるか、念仏歌が歌われていたと考えられる。
- 7 2004年の筆者の現地調査による。今でもノロの住んでいた建物は住宅地に残っている。
- 8 調査方法としては、沖縄本島では、主に赤田、古堅、野嵩のミルクの関係者に教えを受けた。また、本島のミルクの出る市町村の文化課に問い合わせをした。また、典拠とした資料は、『沖縄県文化財調査報告書第60 沖縄諸島の民俗芸能』〔沖縄県教育庁文化課編集 1984年 沖縄県教育委員会〕、『沖縄諸島の民俗芸能』〔沖縄県教育庁文化課編集 1985年 沖縄県教育委員会〕、『赤田ミルク 復興の記録』〔赤田のみるくウンケー実行委員会発編集発行 2000年〕、『沖縄の祭祀と民俗芸能の研究 琉球叢書6』〔大城學 2003年 砂子屋書房〕である。八重山諸島では各島のミルクの関係者に教えを受けた。勿論、実際に、沖縄本島・八重山諸島の幾つかのミルクの現れる祭りを調査した。
- 9 『南島の祭り』〔小野重郎 1994年 第一書房〕参照。
- 10 ミルクの祭りにおける現れ方も、筆者は広い意味で芸態と考える。
- 11 今でも人びとは部落と呼ぶので、その呼び方に従う。
- 12 「中国の仮面—呪力を備えたまなざし—」〔『アジアの仮面』 2000年 P74〕。
- 13 郡城迎春日、胥役輩賃鬼面、粧扮雷神、県抜見年里長供慶之。前迎春三日、雲試春雷、連群引

類，臨門屠鷄索賞。又有一種市井舞小鬼者，自正月十一起至元宵杜止，沿街人跳舞。明崇禎七年春，張直指應量按丁禁之〔P219〕。

- 14 清咸書《邵武縣志》には、閩北と江西儺舞の郷である南豊県が隣接しているという地理的事情も閩北に儺舞いが流行した重要な要因であると述べてある。
- 15 原文には「笑容可掬」と記されている。
- 16 東恩納寛惇 1980年『東恩納寛惇全集8』第一書房
- 17 沖縄の祭祀における狂言とは、奉納芸能の舞踊に対して、物語性のあるものをさす。
- 18 石垣島には「ナナツインガニ」という中国風道行き芸能がある。（『八重山の民俗芸能（2）参照』）
- 19 お供の持つミルクの供物について、阿佐伊孫良さんは次のように語る。「鞠は高貴な方が遊ぶもの。下駄も草履も高貴な方が履くもので、昔は百姓は裸足だったから人生の目的は下駄やカーサバ（草履）を履くことだった」。
- 20 御嶽の中の神の在所。御嶽の中で最も聖なる所・石。その前には香炉が置かれている。
- 21 現在は高盛一人さんが衣装を着け帯を結ぶ役だが、高盛家と與那國家は親戚である。竹富島では、ミルクには関係者以外の人は携わってはいけないと言われている。
- 22 八重山諸島では昭和六年に石垣小学校に奉安殿が造られたのが最初である。
- 23 女性は靈威を持ち、男きょうだいを守るという信仰。
- 24 冠船に乗って来島した冊報使たちをもてなす為の芸能。琉球王朝は冊報使たちをもてなすために踊奉行を設け、数多くの舞踊や演劇を仕立てた。これらの芸能を総称して御冠船踊りという。
- 25 1719年、尚敬王の迎えた冊封使の副使徐葆光による記録。
- 26 有澤晶子 2002年「中国伝統演劇の上演形態にみる祭の形跡」『アジア文化研究プロジェクト Vol.13』学習院大学東洋文化研究所 アジア文化研究プロジェクト事務局
- 27 神々の誕生日を祝う祭りのこと。
- 28 『村芝居 ぎのわんのムラアシビ』で當間一郎は、「ムラアシビについて」で次のように述べている〔『村芝居 ぎのわんのムラアシビ』2001年 P12〕  
今日、各地のムラアシビ（村踊り、豊年祭）に伝わる踊りや組踊などのほとんどは、1719年以降の御冠船芸能として演じられた演目が、心得のある人の訪問で直接に入ったもの、あるいは沖縄芝居の役者を通して、また芝居を見に行ったムラアシビの関係者が持ち帰り、組み立てて再演したものなどである。
- 29 姜忠信 2003年『仏陀尊像故事』宗教文化出版社
- 30 『中国と日本の神 仏教、道教、儒教、神道』〔オドン・ヴァレ 2000年 創元社〕にはタイのマイトレーヤ（弥勒菩薩）像の写りが載っているが、ミルクそっくりの顔である。
- 31 「唐人行列」の資料は、『沖縄文化財調査報告書71集 沖縄諸島（中部北部）の民俗芸能』〔沖縄県教育庁文化課編集 1985 沖縄県教育委員会〕による。又、調査は2005年9月に行なった。
- 32 儀間真謹 藤原稜三 1986年『対談 近代空手の歴史を語る』株式会社ベースボール・マガ

ジン社

33 『石垣市史叢書2 与世山親方八重山島規模帳』〔石垣市総務部市史編集室 1992 石垣市役所より

## 学界消息

### 日中人文社会科学学会

日中人文社会科学学会は、悠久な交流の歴史を持つ中日の間に更に橋を一本架け、両国の学術界の理解・友誼・交流を促進しようという初志で、①日中両国間の学術交流を行い、②新しい学術環境を創造し、③優れた学術成果を公表するという目的をもって、日本における中国人学者と日本人学者とが共同に協力して作り上げた学会である。この学会は、2004年7月10日に設立され、名誉会長石川忠久、顧問伊藤漱平、劉起鈺、会長黄華珍、副会長張仕英、松田存とし、以下会員100名程度の小さい学会である。学会設立のきっかけとなったのは、2003年12月に中国の有名な「中国社会科学出版社」から公刊された論文集『文学・歴史與人文精神—在日中国学者的思考』（黄華珍、張仕英主編）が好評であったことである。その後、著者たちの要請に応じて、在日の性質から日本の研究者も入れるような学会を設立することになった。今年7月に開催された学会総会において、関西方面会員の要請に基づき、総会の承認を得て関西分会が立ち上がりました。

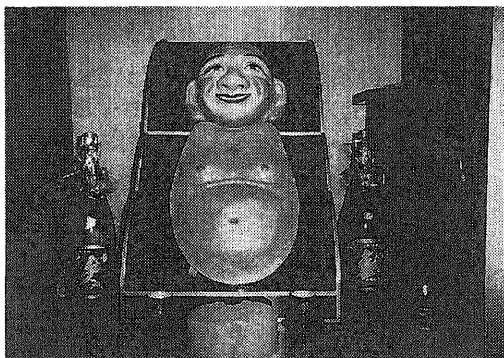
この学会は、設立以来多種多様な学術活動を

展開し、二松学舎大学や東京電気通信大学などにおいて、年2回のペースで研究大会を開いた。研究大会には、渡邊欣雄（首都大学東京教授・社会人類学）や湯川敬弘（電気通信大学教授・比較思想・哲学）など、多分野にわたる有名な学者を招いて特別講演を行なった。研究発表にも文学や思想史・哲学、文化人類学・民俗学、社会学など多岐にわたる分野のものがあった。また、今年9月9日には、日中人文社会科学学会において相互の交流、理解と認識を深め、21世紀の日中人文社会科学の発展を促進するために、中国・北京大学において、「日中人文社会科学国際シンポジウム（2005）…20世紀学術交流の回顧と21世紀の研究課題の展望」という国際シンポジウムを北京大学日本文化研究所と共催した。日中両国の関連分野の多数の研究者が出席し、交流・懇談ができた。

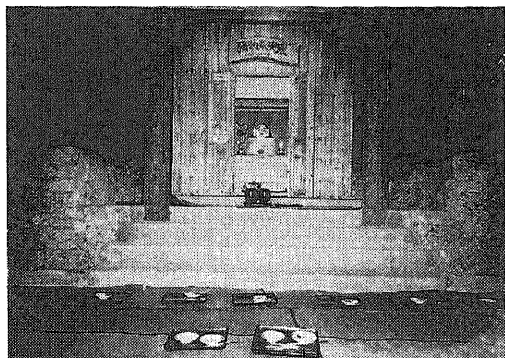
日中人文社会科学学会は、論文集形式の機関誌『知性與創造—中日学者的思考』を編集し、今まで延べ50編くらいの論文を2集に編成し公刊した。

（蔡文高）

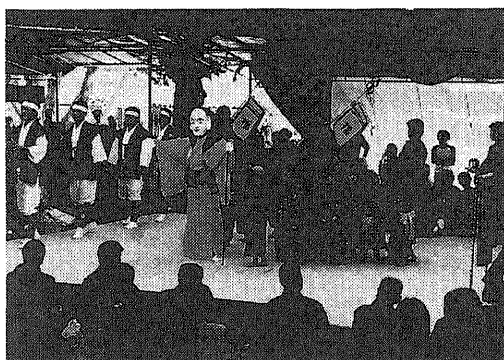
図版



①赤田公民館にある赤田のミルク



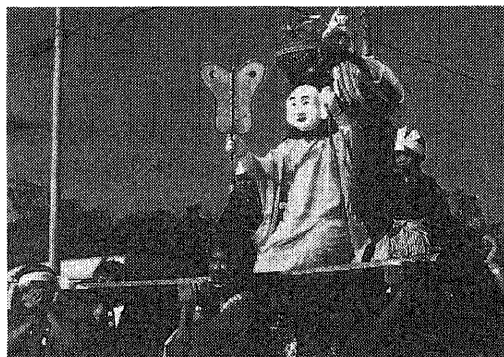
②竹富島の弥奉勒安殿



③竹富島種子取祭のミルク



④波照間島ムシャーマのミルク



⑤黒島東筋旧正月のミルク



⑥神戸南京町のシシと大頭仏